

## 第2章

# キリバス離島村落における個人商店の盛衰

### 資本家階級発生の「不可能性」をめぐる一考察

風間 計博

#### はじめに：太平洋島嶼部における階級論

近代西欧社会における資本主義の発達過程が論じられるなかで、階級は主要な社会科学的概念のひとつとして採りあげられてきた。階級の捉え方は多様であるが、生産手段あるいは財産所有を階級区分の基礎とした、マルクスやウェーバーによる古典的な概念が出発点となっている。そして、他の社会科学的概念と同様に階級概念も、対象とする社会の時代状況に応じて練り直され、再解釈されてきた。当然ながら、現代のグローバル化した世界において生起する社会的諸現象を、古典的な階級概念によって説明することは困難であろう(Savage[2000])。現代世界においては、エスニシティやジェンダー、エコロジー、宗教といった諸問題が階級に関わる言説に絡みついており、複雑な様相を呈している(安田[1998], Fenton[1999])。

近代西欧社会とは異なった社会・歴史的脈絡にある、太平洋島嶼部における階級を論じる場合、地域の状況に合わせた視座の設定が必要となる。この地域において階級を論じた研究をみると、二つの視座からのアプローチが可能である。ひとつは、生産関係に規定された諸階級ではなく、高等教育を受けた給与所得者である都市中産階級を中心に論じるものである(Hau'ofa[1987], Benguigui[1989], 春日[1991])<sup>(1)</sup>。太平洋島嶼部社会における、高等

教育を受けた中産階級の主役は、植民地政府から独立国家の制度に引き継がれた官僚・公務員である<sup>(2)</sup>。ゲワーツらによれば、パプア・ニューギニアにおいては「西欧的な」生活様式を維持し、世帯内で英語のみを話し、高学歴者を再生産する都市中産階級が登場してきたという (Gewertz and Errington [1999])。彼らのいう階級とは、ブルデューによる階級概念に近接している。先行諸研究においては概ね、このような「教育エリート」を新たに登場してきた階級と位置づけている<sup>(3)</sup>。

もうひとつの視座は、本書の第1章で塩田が論じたように、新たに出現した「ビジネス成功者」を資本家として捉え、太平洋島嶼部における階級論の地平に乗せたものである (Finney [1973] 参照)。

これは、太平洋島嶼部の階級論で都市部の教育エリート出現が中心的に論じられてきたなかで、高等教育を受けていない企業家に焦点を当てた試みといえる。本章では、ひとまず教育エリートを射程からはずし、後者に関わるビジネスに焦点を当てる。塩田は、ビジネス成功者 (= 資本家) の出現を新たな階級形成の萌芽と捉えている。対照的に本章では、ビジネス成功者の出現どころか、ビジネス自体が容易に成立しえない太平洋島嶼部社会の状況を民族誌的に記述していく。具体的には、中部太平洋に位置するキリバス南部離島村落において、物資欠乏下に興った個人商店を主たる対象とする。

さて通常、階級論が前提とするのは、資本主義的市場経済の定着した近代西欧社会である。資本主義の論理のもとでは、貨幣は蓄積され、自己増殖していく資本として捉えられる。それは投資されて利潤を生み、再投資されるという、際限のないサイクルを形成する。資本主義的市場経済のもとで、資本家や支配的な中産階級は、ウェーバーのいう「資本主義的精神」を多かれ少なかれ共有しているはずである<sup>(4)</sup>。太平洋島嶼国で中産階級が発生しているならば、中産階級の人々は「西欧的な」生活様式を追求するとともに、何らかの形で「資本主義的精神」を内在化し、機会に応じてそれを発揮していると考えられる。

一方、市場経済の論理と形式的に対置できるのは「贈与の論理」である<sup>(5)</sup>。

ここで、貨幣を用いた交換であっても、市場経済の論理ではなく、贈与の論理に則った交換があることに留意する必要がある（上野 [1996: 173] 参照）。また、近代西欧を対象に据えた政治経済学において、階級は資本主義を所与のものとして論じられるが、本章で採りあげたキリバス離島村落では、その前提自体が成立し難いことを示す。そこで、以下の手順で論を進める。

(1) キリバス離島村落部においては生活必需品などの物資が常態的に欠乏し、その意味で貧困状態にあるということが可能である。ここで太平洋島嶼部における地域経済論に着目し、キリバス離島部において物資欠乏が、国家レベルの政治経済により規定され、構造的に生じることを論述する（第1節）。つぎに、平等性と集団性が強調される村落社会の特徴を概略的に示す（第2節）。

(2) ここで、物資欠乏下における個人商店の消長に論を転じる。太平洋島嶼部の階級論では、村落住民を一枚岩的に捉えている。しかし実際には、村落のなかでもビジネス活動に伴って経済格差が生じうる契機がみられる。そのひとつが個人商店の設立であり、財を個人的に蓄積しうる可能性が生じる。そこで、複数の個人商店が設立された経緯、および周囲の人々の対応を、具体的事例に基づいて記述する（第3節）。

(3) 結果的に個人商店は消失するが、その背景にある在地の人々の観念を見逃すべきではない。離島村落部における商店の存続条件を検討することにより、在地の論理を浮き彫りにする（第4節）。

(4) 商店においては当然、現金を用いた取引が行われている。しかし、市場交換における近代貨幣の論理は、在地の論理に合致していない。在地の論理を体現する贈与の領域が卓越する状況において、貨幣が社会に摂り込まれている様態をみる（第5節）。

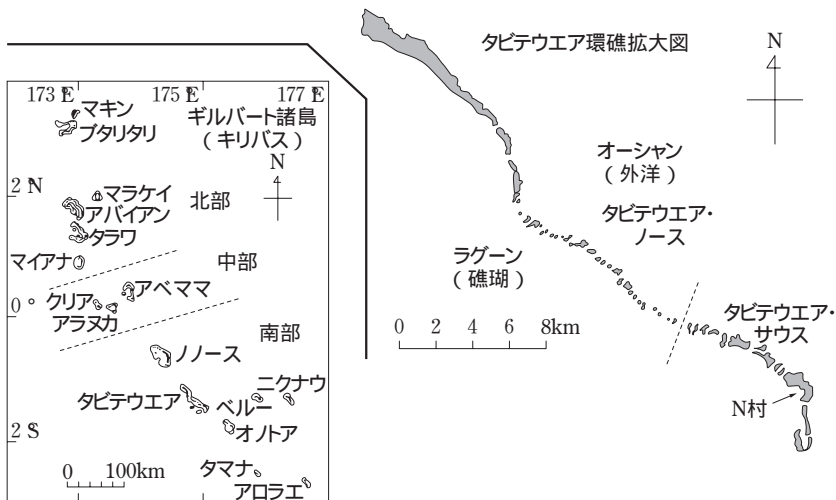
本章の目的は、第1章の塩田論文が描く資本家階級発生 of 極端な対照例として、キリバス南部離島村落では、贈与の論理が卓越するなかでビジネスは成功しえず、また貨幣は資本に転化しえないことを、商店の林立と衰退の事例を採りあげて論証することにある。したがって、キリバス村落部では貨幣経済が浸透しているにもかかわらず、資本家階級発生 of 可能性が否定される

ことになる。そして、太平洋島嶼部においては、在地の資本家が発生するというパプア・ニューギニアの事例が、むしろ特殊であることを指摘したい。

## 第1節 物資欠乏の生起する離島村落

キリバス共和国 (Republic of Kiribati) は、中部太平洋に位置する小島嶼国家である。国家は、ギルバート (キリバス)<sup>(6)</sup>、フェニックス、ラインの3諸島からなる (図1)。すべての島々は、サンゴ礁からなるいわゆる「低い島」(low-island) である。うち主要諸島のキリバス諸島に全人口 (約8万人) の90%以上が集中し、他諸島を構成する多くの島は無人口である。本章の対象地であるタビテウエア (Tabiteuea) 環礁は、キリバス南部に位置し、南北二つの行政区に分けられている。私が実地調査を行ったのは、環礁南部の行政区、タビテウエア・サウス (Tabiteuea South) のN村である<sup>(7)</sup>。

図1 キリバスとタビテウエア環礁



(出所) Trease ed. [1993], および Land and Survey Division, Government of Kiribati, 1980年発行の地図より筆者作成。

### 1. キリバス離島村落の政治経済学的位置

ここでタビテウエア・サウスを取り囲む政治経済的状况を概観する。ミクロな実地調査地は明らかに開放系であり、そこで生じる事象を同時代の社会・経済的文脈で捉えようと試みるためである。ただし、調査地の小規模な社会は、何重ものフィルターを通して外部世界と接続するのであり、マクロな外部世界と直接的に結びついているわけではない。そこで、外部世界と調査地との間を段階的に架橋していく必要がある。外部のマクロなシステムと微小な調査地との架橋を試みるには、太平洋島嶼地域の国家群に特徴的な国民経済論を援用することが有効である（風間 [1999a]）。

太平洋島嶼地域は、世界システムに包摂されながらも、きわめて特異な位置を占めている。島嶼地域には複数の独立国があるが、いずれも国土の狭小性、国土の分散性、資源の貧困性、人口の小規模性、巨大市場からの遠隔性といった諸特徴を共通項としている。

資本主義世界システムは、中核国による周辺部の搾取構造をもつとウォーラステイン [1981] はいうが、現代の太平洋小島嶼国に関していえば、搾取するに足る資源はほとんどない。むしろ中核国からの経済援助など、搾取とは逆の財の流れが国民経済にとって重要である。このような太平洋小島嶼国の経済状況は、MIRAB経済という説明概念で捉えられてきた（Bertram and Watters [1985], Bertram [1999]）<sup>(8)</sup>。MIRABとは、出稼ぎ移民（MI: migration）、その故郷への送金（R: remittances）、外国からの経済援助（A: aid）、国家収入を国民に分配する機能を果たす、相対的に大きな官僚機構（B: bureaucracy）の頭文字をとったものである。自律的な経済発展の可能性がない小島嶼国では、国内で産業を興すことは困難である。MIRAB経済論では、海外からの援助を政府機関の大量雇用に戻し、また海外出稼ぎ移民から本国に住む親族への送金によって、国民経済は何とか維持できるという。

MIRAB経済を提唱したパートラムらは、キリバスをMIRAB経済諸国のひ

とつに入れている。確かに、キリバスの国民経済はMIRAB経済に類似した特徴をもつ。しかし、詳細に検討してみると現在のキリバスでは、出稼ぎ移民の形態がMIRABモデルとは異なる<sup>(9)</sup>。キリバスの国民経済は、歳入均衡化準備基金 (F: fund) の運用益, 入漁料収入 (F: fish royalty), 経済援助 (A: aid), 官僚制 (B: bureaucracy) に特徴づけられる (表1)。別稿において私は、この特徴的な経済に対して、頭文字をとってFFAB経済と名づけた (風間 [1999a])。ここでFFAB経済は、MIRAB経済の亜類型と捉えることが可能である。MIRAB経済では、親族の紐帯によって海外出稼ぎ移民から故郷への送金が強固に保たれるが (須藤 [1997]), FFAB経済では海外出稼ぎ移民は主要な要素ではなく、外部とのチャンネルはきわめて脆弱である。

私は、搾取するに足る資源のないMIRAB経済に特徴づけられる太平洋小島嶼国を、現代の資本主義世界システムの「最周辺国家」とし、FFAB経済のキリバスを島嶼部のなかでの周辺に位置づけた。さらにキリバス国家内部において、タビテウエア・サウスは、首都から離れた辺境と規定した (風間 [1999a])。FFAB経済の特徴は、キリバス国内では資金の大半が投下される首都タラワ (Tarawa) において顕著に見られる。しかし、辺境のタビテウエア・サウスにまでは十分に浸透していない。すなわちキリバスの離島部は、

表1 独立後7年間のキリバス共和国における国家歳入

(単位: 1,000豪ドル)

	1979年	1980年	1981年	1982年	1983年	1984年	1985年
税収入	13,113	6,159	4,417	4,465	4,605	4,458	4,992
対外収入							
RERF	—	4,250	5,751	4,750	5,500	5,500	5,182
無償財政援助	—	2,000	2,017	3,500	3,500	1,774	1,485
入漁料	614	616	1,255	—	983	1,936	3,006
他	294	267	1,389	430	223	514	235
その他収入	3,628	3,477	2,217	3,211	1,900	1,186	1,323
合計	17,649	16,769	1,7046	16,356	16,711	15,368	16,223

(注) RERFとは歳入均衡化準備基金の略。

(出所) Ministry of Finance [1988] より筆者作成。

世界システムに包摂されながらも強力な搾取構造に組み込まれず、経済的には物資や資金のわずかな移入によって外部世界と結びつくのみである。

キリバス離島は、物資の生産地から政治経済的に最も遠隔の地であり、商品連鎖 (commodity chain) の最末端に位置する。海外から輸入された物資は、首都の港に到着するが、その大半は首都で消費され、タビテウエア・サウスまで到達する量は限られている。

商品連鎖の最末端では、交通・流通基盤が未整備なため、主食の米・小麦粉や灯油等を含む、生活必需品さえも途切れがちとなる (第3節1項参照)。そこでは、構造的に物資欠乏状況が生じ、継続しているのである。このような同時代の政治経済的な諸条件下において、タビテウエア・サウスで生じる社会・経済的事象を捉える必要がある。

## 2. 生業的食料生産の脆弱性

政治経済的な位置により生起する物資欠乏状況に加えて、タビテウエアを含むキリバス南部離島の生態的条件はきわめて過酷である。島々はサンゴ性の石灰土壌に覆われ、かつ降雨量が不安定でしばしば旱魃に襲われており、陸生の植物資源はきわめて限定的である。19世紀には、旱魃による食料不足により、餓死者が出たという記録が残されている。

食料用の植物資源としては、環礁の自然環境に適合したパンダナス (*Pandanus tectorius*)、スワンプタロ (*Cyrtosperma chamissonis*)、ココヤシ (*Cocos nucifera*) があげられる。パンダナスの果実は、生食されるとともに保存食品に加工される。スワンプタロは、地下水が滲出する深さまで掘った人工的な沼状の掘削田に植え付けられ、施肥されて栽培されている。ココヤシ果実は食料として消費されるが、自家消費以上に換金作物として重要である。

換金目的に拡大してきたココヤシを除き、残る2種は、日常的食料品としての重要性が著しく低下している。ココヤシを新たに植え付ける前にブッシュに火入れするが、パンダナスは、しばしば他の灌木とともに焼き払われ

てしまう。スワンブタロの施肥や掘削田の手入れは不定期に行われるだけであり、ブッシュでは放棄された掘削田を数多く見ることができる（風間 [2002]）。すなわち、生業的な食料生産は植民地期以降、今日に至るまで衰退を余儀なくされている。

また、漁撈活動は、意外なことにそれほど盛んではない。村人たちは、毎日漁に出るわけではない。当然ながら、天候不良時には出漁することはできない。さらに、不定期の賃労働や協同労働、ココヤシの果肉を加工するコブラ生産に時間を費やすため、漁撈に従事する機会は限られる。ラグーンで行われる少人数の網漁では、世帯が一食で消費する程度の漁獲さえ得られないこともある。外洋では回遊性の魚類が捕獲される。しかし、帆のついたカヌーを操る技能をもつ者は少なく、外洋漁は不定期的にされる程度である。村人が共用の舟外機を使って外洋に出ることもあるが、これは個別世帯の消費用の漁ではなく、主に共同体の饗宴 (*botaki*) に供出する魚を獲るために行う。

在地生産物に代わって、今日では主にオーストラリアから輸入された米や小麦粉が——これらはしばしば欠乏するが——主食となっている。副食であるコンビーフや鯖缶なども、主に饗宴の際に消費される。キリバス南部では、降雨量の不安定なサンゴ島という自然環境に加え、自給的農耕から換金作物栽培への置換が進行し、食料生産に関わる生業経済はきわめて脆弱となっている（風間 [1997]）。したがって、村落部であるにもかかわらず、タビテウエア・サウスにおいては、在地の生産物だけで人々が食料を充足することは不可能である。

以上のように、生態的諸条件およびそれに連結した世界システム最周辺の離島という政治経済的条件下にタビテウエア・サウスはあり、そこに住む人々は何らかの物資が常態的に欠乏する状況下で日常生活を送っている。

### 3. 村落住民の経済状況

タビテウエア・サウス、N村における1994～95年時点の世帯の収入状況を



みる(表2)。調査時点のN村には、30世帯180人が住んでいた。まず、村で安定した収入があると見させるのは、地方裁判長、国会議員、空港補助業務、警察官・パトロール(3人)の6人である。

ただし、空港補助業務、パトロールに関しては、定収入は30豪ドル以下である。航空会社エージェンツは、乗客数によって収入が変動し、月に150豪ドル以上の収入を得るときもあれば、欠航が続くと収入がない月もある。島議会議員や長老会議議長は、島政府の集会所で合議があるときに、5~10豪ドルの手当てが出る程度であり、定収入があるとはいえない。また、1995年から教員となった男性は、採用されると村を出て学校教員宿舎に移り、村の社会活動には参加しなくなった。

村に住む外国船出稼ぎ者は1995年時点で8人おり、親や兄弟に対して、世帯あたり月100~190豪ドルもの仕送りをしていた。ただし、乗組員になるには、倍率の高い入試に受かったうえ、首都にある訓練校を修了する必要がある。首尾よく入学できた場合でも、落第することもある。乗組員になっても、喧嘩や飲酒が原因で容易に解雇される。出稼ぎ中に急死したり、厳しい労働条件のために自ら下船する者もあり、安定した出稼ぎ先とは言い難い(風間[1999b])。一方、首都に住む親族から定期的に仕送りをしてもらうことはない、と人々は言っていた。大きな饗宴を主催する場合など、臨時に大金が必要なときに限り、無線を使って首都の親族に送金を依頼するという。

出稼ぎ者や定収入者のいない世帯では、唯一の換金作物であるコブラ生産に依存して現金を得ている(風間[1997])。人々は生産したコブラを生協に運び、計量後、現金を受け取る。しかし、コブラの生産は不安定な降雨量の影響を受ける。N村におけるコブラ生産量は、1994年7月から1995年6月初旬までの約11カ月間に3万1548キログラムであった。コブラ収入が不明瞭であった4世帯を除く平均をとると、1世帯1カ月当たりのコブラ収入は約40豪ドルであった。

コブラの買い取り価格は、国際市場の変動を直接受けないように政府により調整される。しかし、それでも長期的には大きく変動している。新大統領

表2 N村における世帯の経済状況

世帯番号	世帯員数	15歳以上の の成員	コブラ 収入	1994年定収	1995年定収	外国船 仕送り	商売、その他
1	6	5	61.9				
2	8	5	34.0				
3	10	5	40.6			100+50	ドーナツ、ナマコ 商店 (1995年4月開業)
4	5	3	16.4	地方裁判官長 (120)	地方裁判官長 (120)	50+50	息子・農業省、魚・ナマコ
5	6	4	56.1	長老会議議長 島議会議長	長老会議議長 島議会議員	娘の夫	娘・教員、娘・公務員
6	2	2	25.6		臨時教員 (50)		魚
7	9	4	33.5				
8	4	2	28.3				
9	11	5	48.7	パトロール (19)	警察官 (72)	110; 80	
10	11	8	83.2			妹の夫	
11	3	2	37.5			妻の兄	
12	4	2	—	パトロール (19)	パトロール (19)	イトコ	パン、魚、ナマコ
13	7	5	51.4			妻の兄	
14	5	2	27.7	航空会社エージェン ト 国会議員	航空会社エージェン ト 国会議員	姉・教員 (後に飛行機乗務員)	
15	9	4	—			100	息子・教員
16	15	9	64.0				
17	4	4	82.6				
18	4	2	23.3				
19	3	3	—				
20	2	2	24.0				
21	10	4	66.8				
22	7	5	40.0				
23	2	2	13.8				
24	4	3	31.6				
25	5	2	35.3				
26	3	2	24.0	空港業務補助 (30)	空港補助業務 (30)		姉・高級官僚 娘・ハワイ在住
27	7	3	14.7	パトロール (19)	パトロール (19)	100; 50	魚、ナマコ
28	7	2	36.1				
29	4	2	—				
30	3	2	27.7				息子・NZ在住
合計	180	105	1,028.8				

(注) (1) コブラ収入、定収、外国船仕送り欄の数字は月収(豪ドル)を示す。

(2) 外国船出稼ぎ者欄の(+)は1人の出稼ぎ者による世帯内の2人への仕送りを、(;)は2人の出稼ぎ者による1人の世帯員への仕送りを表す。

(出所) 現地調査により筆者作成。

が誕生した後、1994年10月に比較的良好な買い取り価格が設定された。しかし買い取り価格は、国家政策や経済状況によって変動するのであり、必ずしも安定しているわけではない。そのほか、人々は、学校や道路建設などの島政府による不定期の雇用、船荷の積み降ろしといった臨時収入を得る<sup>100</sup>。また、乾燥ナマコやフカヒレを、時折やってくる仲買人に売ることも行われていた。

以上のように、安定した職に就く村人はごく僅かであり、残る村人は天候や買い取り価格の変動に左右されるコブラ生産に現金収入を大きく依存していた。

## 第2節 キリバス村落社会の特徴——平等性と集団性——

本節では、タビテウエア・サウス村落社会の特徴的な側面を顕著に示すものとして、集会所 (*mwaneaba*) に焦点を当てる。キリバスの集会所は、通常、パンダナス葺きの入母屋式屋根で壁のない大型建築物である。グリンブルやモードによるキリバスの先駆的民族誌 (Grimble [1989], Maude [1977 (1963)] [1980 (1961)]) において、集会所は「伝統的な社会生活の中心」として描かれている。

### 1. 集会所を中心とした社会編成

当然ながら、私の調査した1990年代半ばのタビテウエア・サウスの社会は、過去の民族誌に描かれたような伝統社会とは似つかぬものであった。しかし、集会所は、現在に至っても島の各所で見ることができる。過去の民族誌に描かれた伝統的集会所は、内実は異なるものの、村の集会所として継承され、各行政村に付随して存続している。加えて、キリスト教各宗派の教会には、教会の集会所が建てられている。他にも、学校や島政府にも集会所が付随し

ている (Kazama [2001])。

調査対象地のN村においては、村、カトリック教会、初等学校にそれぞれ集会所が付随していた。すなわち、キリスト教や植民地期以降に導入された諸制度に対応して、集会所の種類と数は増加しているのである。現在のタビテウエア・サウスにおいては、社会集団の分節ごとに新たに集会所が建てられる状況である。集会所は、伝統的社会モデルとは異なった形で、現代の島社会のなかで意味や機能を変えて、建設され維持されているのである。

人々は、社会集団に対応して集会所を建て、そこでの話し合いによって集団や組織の運営方針を決定し、多様な行事を執り行う。社会は大きく変化してきたが、集会所は社会生活の中心であり続けている。各種の集会は、村の長老男性 (*unimwane*) が主導する。集会では、既婚男性が前列に、その背後に既婚女性や未婚者が座る。村の既婚男性は、世帯や夫婦の代表として集会に出席する。

集会所の合議 (*bowi*) では、不定期の賃労働や村の協同労働の分担、饗宴 (*botaki*) の準備などについて話し合われる。合議においては、在地の論理に沿ってあらゆるものごとが決定される。決定は、参加者すべてに平等 (*boraoi*) でなければならない。誰かが不平等 (*bobuaka*) であると異議申し立てをすると、参加者誰も納得がいくまで、話し合いは延々と続けられる。平等であることが、参加者全員をとりあえず納得させる条件となる。島政府から降りてきた賃労働の分担、客からの贈与物、物資の供出義務などは、均等でなければならない。平等性は、個人間、夫婦単位間のみならず、村などの社会集団間にも適用される。ここでの平等とは、主に経済的な財分配や負担を可能な限り均等化させる理念といえる。

合議では、長老のみが発言するわけではなく、長老に至らない既婚男性が意見を言うこともある。長老の発言は、必ずしも決定権をもつわけではない。むしろ、長老は意見を述べることに加え、多様な意見を調整する役割を担う。集会所における合議の決定は、しかしながら、「長老が言った」 (*E taku unimwane*) と説明され、長老の権威に基づいて社会集団のすべての人々が従

うべきとされ、強制力をもつ。決定に従わない者が出た場合、罰則 (*tua*) が設定されることもある。そのときには、罰金が科せられたり、成員全体に対する食事やお茶の供出などが強制されたりする。このように、集会所を中心とした社会集団においては、強い集団性と平等性の強調を見ることができる。

国家の側から見ると、村の集会所は行政機構の最末端に位置づけられる。しかし、集会はあくまで長老主導で行われる。ときおり、島政府の役人や首都からきた国会議員が、公聴会のために村の集会所を訪れることがある。その際、彼らはあくまでよそ者 (*iruwa*) として扱われる。彼らはまず、集会所のラグーン側の席に案内され、食事を振舞われる。その後、問題についての説明がなされ、人々から質問が出される。島政府を経由してきた国家の離島政策であっても、村集会所で話し合いがもたれ、そこで人々が納得しなければ、容易には受容されない。

饗宴は、個人の人生儀礼、来客の歓送迎、クリスマスなどキリスト教の祝宴や、国家の独立記念の行事などさまざまな機会に各種の集会所において開催される。競合的な踊りや合唱、共食、談話、客からの贈与が饗宴の構成要素である (風間 [1999c])。キリバス語の「平等」は、「平和」、「滑らか」といったニュアンスをもつ。遊びや談話を通じた社会集団間や参加者間の友好関係の確認も「平等」であり、食事を振舞われ、楽しんだ客から主催者へのタバコや金銭の贈与も「平等」である。贈与されたタバコは、文字通り均等に参加者間で分配される。物資が欠乏しがちなタビテウエア・サウスにおいて、集会所で開催される饗宴では、参加者全員で一度に大量の食料を消費する。そこでは、さまざまな意味の「平等」が顕在化するのである。

## 2. 懇請慣行

前項においては、集会所を中心とした、社会集団レベルの平等性が強調されることを見た。一方、日常生活における物資の平準化を促す慣行として懇請 (*bubuti*) があげられる。懇請の語は、人に何らかの要求をするとき、丁寧

な表現として用いられる。この語は、日常的なごく些細なお願いを表す場合から、より形式的な要請を表す場合まで広く使われる。日頃耳にするのは、離れたところに置いてある物をとって欲しいとき、ライターなどの小物をその場で使用するために借りるときなどがある。またこの語は、より大きな物や財、サービスなどの形式的な懇請、要請を表す。例えば、島の長老会議から中央政府に陳情する場合、長老たちから中央政府への懇請と表現される。首都のラジオ局に歌などをリクエストするのも懇請といわれる。

ただし私の見た限りN村では、近隣の世帯からタバコや調味料、食器などの物を貰ったり借りるときに、必ずしも懇請という言葉を使う必要はない。言い換えれば、懇請の行為には、言葉が必ずしも伴わない。人々の相互行為に何らかの要求が含意されていれば、懇請と考えてよいのである。ここには、余剰の物資、今現在使っていない道具、あるいは人のもつ技術は、現時点で必要とする人に与えられるべきであるという相互の了解がある。余裕のある者が鷹揚 (*tituaraoi*) に振る舞うことが当然とされており、懇請を断るのは恥ずかしい (*mama*) ことである。実際上はともかく、もし1回目の懇請で断られても、2回目は必ず受け入れられるという言葉は私は何度となく聞いた。また、自転車などの貴重品を借りた場合には、使用后返却するのが普通であるが、貸与された者は返済の義務を必ずしも負わないことも大きな特徴である。

さて、N村で最も顕著に懇請を受けるのは国会議員であろう。1995年7月、国会議員は首都へ出かけていった。彼が首都へ行く前になると、他村から人が集まって懇請しに来る。国会議員は人々の要求を逐一ノートにメモして、首都で買ってくる。しかし「その代金を貰ったことは一度もない。運んでくるのも大変だ。大きな物は輸送費もかかる」とこぼしていた。人々の側からすると、国会議員を選ぶのは島の住民であり、そのおかげで彼は高い給料を得ているので、懇請に応えるのは当然なのだという。国会議員の妻は「それほど多くの収入を得ているわけではないし、懇請で給料のほとんどを使い果たしてしまう」と言っていた。

9月初旬に戻ってきた彼の家には、品物を取りに再び人が集まって来ていた。ラジオカセット、バケツ、タバコ、シャツ、食料品、さらには自転車まで懇請する人がいるという。

国会議員は今後、人々の共有できる物を買ってきたら皆で使い回してもらうこと、要求された物の全額を彼が負担するのではなく、一部を援助するにとどめたいと私に語った。しかし、彼の要望が実現したか否か、確認には至らなかった。

以上のように、村落社会においては社会集団内の平等性が卓越している。広義の経済に関していえば、贈与交換の領域が社会集団を覆っていることがわかる。

### 第3節 個人商店をめぐる推移

本節では、平等性が卓越する社会集団のなかで、貨幣経済がいかなる様態にあるかを個人商店に着目して見てみる。離島村落部であっても、貨幣の不均等な蓄積を完全に排除することはできない。タビテウエア・サウスにおいては、1995年頃、物資が極度に欠乏した後に、個人商店が林立した。これは、個人的な財の蓄積を生じせしめる、ひとつの契機と考えられた。しかし、財蓄積は在地の平等性に反することは明らかであり、そのような事態に人々がどのような態度を示したのか、一連の動向を以下に示す。

#### 1. 輸入物資の欠乏期

私が調査を開始した1994年9月から1995年3月にかけて、タビテウエア・サウスでは、輸入物資が慢性的に不足していた時期だった。人々は生活必需品や主要食料品を輸入物に依存しており、物資の欠乏は人々の生活に大きな影響を与えていた(風間 [1997])。この時期、N村に商店はなく、行政区内

では、島の中心地テオボキア (Teobokia) の生協、隣村のプロテスタント信徒共同経営の商店および個人商店、行政区北端の村の商店、南端の村の商店、計5店があった。これらの店は主として首都の生協卸売り公社KCWS (Kiribati Cooperative Wholesale Society) から物資を仕入れて小売りしていた。ところがこのKCWSの経営状況が振るわなくなり、結局1995年3月に解散してしまった<sup>(1)</sup>。島の各商店が首都のKCWSに注文しても物資が届かなくなり、物資欠乏は深刻さを増した。米、小麦粉、タバコ、石鹼、缶詰、砂糖、塩などあらゆる物資が常態的に不足していた。また、島政府が直接販売している灯油やガソリンもしばしば欠乏した。

1994年11月16日、午前10時頃から、N村集会所でKCWSおよび生協の職員による経営状況の説明会が行われた。各村から生協への出資者が続々と集まってきた。N村からも数人の既婚男性が出席した。以前、ある女性は、生協に出資すれば配当金が戻ってくるのだと嬉しそうに語っていた。しかし、この日の説明会は陰悪な雰囲気であり、集会所には時折怒声が響いた。出席者は詳細を語ってくれず、私は詳しい説明を得ることができなかった。出資と無関係だった男性によれば、2万1000豪ドルが消失してしまったという。首都へ物資を注文しても何も届かず、払い込んだ代金もどこかへ消えてしまった。何の対策も解決への糸口も見えないまま、17時頃まで合議は続いた。この後、翌年3月にKCWSは解散し、タビテウエア・サウスの生協店舗は残ったものの、全く機能しない状態が続いた。

表3に、1994年7月から9月の間、生協店舗に入荷した物資の記録を示す。これは1995年1月20日に私が店舗において直接台帳を調べたものである。台帳の記載によれば、米や小麦粉は1994年8月3日に入荷したのを最後に全く入っていない。その後、タバコ、バター、ヘアバンドなどが僅かに入荷しただけだった。9月30日に粉ミルクが入荷して以降、台帳を調べた1月20日までの間全く何の記載もなく、生協は実質的に機能していなかった。生協以外の店には時折物資が入ったが、その量は不十分であった。

船がタビテウエア・サウスに到着すると、ラグーンの沖合に停泊する。ラ



表3 生協店舗における入荷物資

日付	物資種類	量	単位	単価(豪ドル)	
1994年7月7日	米	80	袋(25kg)	18.9	
	小麦粉	43	袋(25kg)	19.1	
	砂糖	22	袋(50kg)	46.3	
	塩	2	袋	17.7	
	コンビーフ缶	10	カートン	67.35	
	カレーチキン缶	5	カートン	83.7	
	バター	1	カートン	82.4	
	紅茶	1	カートン	39.5	
	粉ミルク	1	カートン	66.1	
	インスタントコーヒー	1	カートン	52	
	ツイストタバコ	2	ブロック	19.8	
	1994年7月14日	漁網用ライン(20ポンド)	4	巻	4.15
		漁網用ライン(15ポンド)	1	巻	3
ツイストタバコ		4	ブロック	19.8	
1994年7月25日	コンビーフ缶(大)	1	缶	21	
	ツイストタバコ	4	ブロック	19.8	
1994年7月28日	漁網用ライン(15ポンド)	1	巻	3	
1994年8月3日	米	71	袋	19.05	
	小麦粉	34	袋	19.25	
1994年8月4日	ツイストタバコ	3	ブロック	19.8	
1994年8月10日	ツイストタバコ	4	ブロック	19.8	
1994年8月16日	洗濯石鹼	1	カートン	33.13	
	ヘアバンド	1	ダース	25.85	
1994年8月19日	ヘアバンド	1	ダース	25.85	
1994年9月5日	粉ミルク	1	カートン	66.1	
1994年9月12日	インスタントコーヒー	1	カートン	43.8	
	調理用油	1	本	3.1	
1994年9月16日	マーガリン	1	カートン	59.1	
1994年9月30日	粉ミルク	1	カートン	66.1	

(出所) テオボキアの生協店舗台帳による。1995年1月20日調べ。

グーンは遠浅なので船が陸地に近づけないためである。満潮時を見計らって船からモーターボートが降ろされ、荷揚げ地との間を何往復もして客や物資を降ろし、コプラを積み込む。干潮になると作業は中断する。船が来ると、

若者や女性が物資の入荷量を確認したり、個人宛の荷物を受け取りに荷揚げ地テオボキアに集まってくる。

物資欠乏期には、陸揚げされた物資が店に入ると、人々が殺到した。そして瞬く間に僅かの物資は売り切れてしまった。そして不確定な次の入荷まで、商店は開店休業状態になった。物資が順調に入荷していれば、N村の人々は隣村の2軒の店か、テオボキアの生協まで足を運ぶ程度である。ところが欠乏期にはわざわざ入荷の噂を聞きつけ、タビテウエア・サウス北端の村の店にまで出かけていった。また南端の村の店には、ほとんど物資が入っていないという。1994年10月30日には、生協近くで乱闘騒ぎがあった。N村の20歳代男性は、首都から入荷した物資を巡って隣村の若者と喧嘩になり、若者にナイフで斬りつけられたという。

1994年末、相次いで2便の船がタビテウエア・サウスにやってきた。しかしその積荷は、クリスマスおよび正月の前後に饗宴で大量に消費されてしまった。年が明けた1995年1月から3月までの期間が、私の調査中、物資が最も欠乏した時期である。隣村の商店経営者は、タビテウエア・ノースまで物資の調達に行っていた。また、個人的にタビテウエア・ノースから米などを送ってもらい、物資欠乏に対応する者もいた。ある店に商品が入ると、別の店から仕入れに買いに来ることも見られた。3月2日、タビテウエア・サウスに待望の船が到着した。その積荷を巡って、人々は半パニック状態になった。隣村の商店には、入荷したら即座に買おうと、夜遅くまで人だかりがしていた。

## 2. 小規模商売の隆盛

物資欠乏期にN村では幾つもの小規模商売が行われていた。ここでいう小規模商売とは、(1)政府の出店ライセンスを取得しているとは限らない、(2)売買専用の店舗を持たない、(3)品物があるときのみ不定期的に売買を行う、(4)商品が1～数種類しかない、といった特徴をもつ小規模かつ不定期な個人的

商業形態を総称している。その点で次項に登場する商店とは異なった特徴を有する。商店や生協に商品が不十分にしか入荷しておらず、物資の需要が高まるという状況のもとで、これらの小規模商売は人々の生活に必要な物資を僅かながら提供していた。

〔Kのタバコ売買〕

1994年11月、成熟したココヤシの実 (*ben*) 20個でツイスト・タバコ1本を売る小規模商売を50歳の男性が始めた(表2: 世帯17)。タバコと交換して得たココヤシの実を割り、果肉を干してコブラを作り、生協のコブラ取引所で換金するのである。コブラの値段は、10月21日に1キログラム当たりの値段が30豪セントから40豪セントに上昇したばかりだった。この頃、Kは天日干しするコブラをブタから守るため、屋敷地の境界に柵を作り始めていた。

ある男性によれば、Kは国会議員に頼んでタバコ6パックを首都から送ってもらったという。タバコ1パック32~34本程度入っているから、約4000個のココヤシの実が集まることになる。現金でなくココヤシの実で売るのは、より儲けがいいためという。しかし全ての実を割り、ブタの侵入と天気を気にしながら天日干しにし、さらに取引所までコブラを運んで換金するのは、かなりの重労働である。

当時、どの店にもタバコがなかったため、Kがタバコを売っているという噂は広く他村まで伝わっていた。ある男性は子供にココヤシ9個を持たせてKのところへタバコを買いに行かせた。一般にココヤシの実1個が10豪セントという認識があり、9個(90豪セント相当)で充分1本のタバコが買えるはずだと考えたためである。ところが、Kはココヤシの実20個でタバコ1本というレートを設定しており、子供が持ち帰ってきたのは半分よりやや短いツイスト・タバコであった。その翌日、麻袋にココヤシの実を詰めて自転車に乗せ、わざわざ隣村からタバコを買いに来た女性を私は目撃した。

この小規模商売は、どの程度の利益があったのだろうか。通常、成熟したココヤシの実1個から平均約200グラムのコブラが取れるという。しかし、キリバスではこれより低い値が出ることが確かめられている(Catala [1957])。

ココヤシ 1 個当たり150グラムのコプラが取れると仮定すると、4000個の実から600キログラムのコプラが取れ、240豪ドルの売り上げがあることになる<sup>12)</sup>。首都の卸売価格でタバコ 1 パックが約20豪ドルであるから、差し引き120豪ドルの儲けという計算になる。ただし、Kが国会議員に懇請して、タバコの代金を払っていないとすると、240豪ドル全てが彼の儲けだったことになる。

その後 2 週間ほどでタバコはなくなり、Kは一時休業したが、再び国会議員に頼んでタバコを買ってきてもらい、小規模商売を再開した。12月初旬、ある集会の時に人々は「Kのところにはココヤシの実がたくさん転がっているから、そこで20個集めてタバコを買えばいい」と擲擲していた。Kの小規模商売は成功していたが、評判はあまりよくなかった。

1995年 2 月には、Kほどの規模ではないが、村のあちこちでタバコを売る者が現れた。この時期、商店の物不足はより深刻化していた。ある既婚女性はタバコ 1 本80豪セントもしくはココヤシの実15個と交換していた。彼女は 2～3 パックほど首都から取り寄せていた。別の男性数人も他村の親族に頼まれてタバコ 1 本80豪セントで売っていた。なお、通常店で買うと 1 本70～75豪セント程度であった。

#### [Bのパン屋]

50歳代男性B(世帯11)は妻とともに、4, 5 年もの間、首都のパン屋で働いた経験をもつ。1989年に彼らがN村に帰って来て後、不定期にパンを作って売っていた。夫婦は1994年 9 月から11月頃まで、熱心にパンを作っていた。理由を尋ねると、首都の中高等学校へ通う娘の学費(年間200豪ドル)を稼ぐためという。学期末休業で12月に娘が帰省するまでに学費を調達したいとのことだった。

B夫婦はパン作り用の金属製の型を所有している。材料の小麦粉に乾燥イースト(またはココヤシティー(ココヤシ花穂から採った樹液))や砂糖などを混ぜてこね、発酵させた後、型に入れてパン焼き用の炉で焼く。一度に12～13キログラムの小麦粉を使い、食パン12個、小型のパン260個を焼き上げる。当時食パン 1 個80豪セント(後に90豪セントから1豪ドル)、小型のパ

ン1個10豪セントで売っていたので、計算上27豪ドルの売り上げがあり、小麦粉代を差し引くと15～16豪ドルの利益が得られる。ただし、小麦粉は懇請されたり、パンや小麦粉の自家消費分があるので、純益はこれより少ないだろう。当然ながら、小麦粉が入手できない限りパンを焼くことはできない。

[塩売買, その他]

ある20歳代男性(世帯21)は、塩1ポンドを10個の成熟したココヤシの実と交換していた。ただし、必ずしもココヤシの実を人々が支払うとも限らない。40歳代女性が、彼のところに塩を懇請しに来た。彼女はココヤシの実を持ってこないばかりでなく、食事までして帰っていったのを私は目撃した。

人々はさまざまな方法で現金収入を得るべく活動していた。物資欠乏期には、初等学校教員の妻がドーナツを作り、1個10豪セントで売る事例もあった。ドーナツ売りは、物資欠乏期が過ぎて後、小麦粉が容易に入手できるようになってから、広く行われるようになった。また、一部の世帯が行っていたココヤシ糖蜜(*kamwaimwai*: ココヤシ樹液を煮詰めたシロップ)を売買していた。

### 3. 個人商店の林立

極度の物資欠乏期を経た4月以降、それまで島全体で5軒しかなかった商店の数が一気に増加するという現象が見られた。私は3月から約2カ月間首都へ行っていた。久々にN村に戻った5月中旬、村の様子には大きな変化が見られた。それまで数年間空き屋になっていたN村の生協店舗に、新たにカトリック説教師が店を出していたのだ。この店舗は数年前に村人が共同で作った生協支店の跡であった。また、説教師の店に続いて、ほかにも新しい個人商店設立の動きがあった。

[説教師の商店]

説教師(世帯2)によれば彼の商店は島政府からライセンスを取得して、1995年4月に開店した。店舗はテオボキアの生協に毎月15豪ドルを支払って、

借り受けているという。開店資金は、首都の開発銀行（Kiribati Development Bank 〈Te Bangken Karikirake ni Kiribati〉）に2000豪ドル借りて調達した。毎月93豪ドルずつ、2年間で負債を返済するという。4月から6月頃までは説教師と妻は物資の盗難を防ぐため、夜は店舗で寝ていた。カトリック教会に付随した説教師の家屋には、息子夫婦やテオボキアに住む娘とその夫の公務員が寝泊まりしていた。店番には説教師夫妻のみならず、息子夫妻や娘もあっていた。

なぜ商店を開いたのかとの問いに説教師は、まず自分自身や家族が物資の欠乏でつらかった (*kainnano*) からだと答えた。欠乏期には隣村やテオボキア、遠くの村まで自転車で出かけて行っても、何も手に入らなかった。しかし自分で店をもてば、つらくなくなる。そして村の人々もつらくなくなるのだと語った。後日、彼は同じ質問に対し、まず村人のためであることを強調していた。

店舗には、それまで島で目にしなかった、文具、缶詰や甘味料なども置いてあった。その他、委託されたドーナツ、塩干し魚などを店に置くこともあった。商品の仕入先は主に首都の卸売りアバマコロ交易であった。ただし、首都からの物資は常に不安定な船便の影響を受ける。米や小麦粉、タバコなどは、欠乏期ほどではないにせよ、不足することがしばしばあった。そのようなときには、息子らがタビテウエア・ノースまで舟外機付きカヌーで出かけていき、商品を仕入れていた。また品物が売り切れた別の店から、説教師の商店にタバコなどを仕入れに来ることもあり、その結果、彼の店は在庫切れになることもあった。

商店に対する村人の反応はさまざまである。物資が以前よりも増えたこと、村内で購入できることは「よい」 (*raoiroi*) と誰もがいう。しかし、値段が高すぎると不平をいう者もいた。不平を言いつつも、多くの村人は商店を利用していた。5月から6月にかけて、商品さえあれば1日当たり70豪ドルから90豪ドル程度の売り上げがあると、娘の夫は言っていた。さらに大きな饗宴がある日には、売り上げが150~200豪ドルに達するという。6月27日に計算

したところ、1週間で約600豪ドルの売り上げがあった。純益は多くても売り上げの2～3割程度と思われるが、これらの売上額は一般の村人にとって驚くべき金額だったはずである。6月8日の売り上げは、1日で150豪ドルに達した。その日の夕刻、説教師が海沿いの高床家屋で売上金の計算をしているとき、40歳代男性Nがやってきた。彼は説教師が数える豪ドル札の多さに驚嘆したらしい。いつもの陽気な雰囲気は全くなく、笑いもせず寡黙になって、説教師が現金を数える様子を真剣な表情で注視していた。

説教師の熱心な商売ぶりに妻をはじめ、家族は困惑しているように見えた。5月31日、彼は隣村のカトリック集会所にタバコとマッチを大量に持っていった。集会所に教会関係者が泊まり込んでいるので、売ろうというのだ。娘は私たちに向かって、「彼は毎日毎日、お金が大好きなのよ」と笑いもせずに英語で言った<sup>13)</sup>。同日、妻は2.5豪ドルの値をつけている鯖缶を1.7豪ドルで売ったと、説教師に激しく責められた。妻は不機嫌そうに「愚かしい」と小声で不平を言っていた。

やがて7月には娘夫婦も公務員宿舎へ帰っていき、徐々に説教師の商売熱もさめていった。1995年10月6日の夕方、ある60歳代女性が、孫に説教師の店へ鯖缶2個を買いに行かせた。孫は手ぶらで帰ってきた。しかも、持っていった10豪ドル札を説教師に取られてしまったという。孫の説明では、説教師は釣り銭がないと言った。さらに、商店は彼の住む家屋から少し離れているので、面倒がって商品を取りに行かなかった。明日来たら缶詰と釣り銭を渡すと彼は言ったという。年配女性は怒り、金を即座に取り返しに行った。すぐに行かないとうやむやになってしまう恐れがあるためであろう。

N村や隣村で多くの商店が林立してきたことも説教師の商売熱がさめた一因と考えられる。6月から9月にかけて、隣村やテオボキアでは私の知る限りで5、6軒以上の個人商店、教会信徒グループの商店ができた。N村ではドーナツ、タバコなどの小規模商売が存続していたほかに、ライセンスをとった個人商店が説教師の店以外にも生まれていた。

彼の商店の値段が高いという噂は、しばしば私の耳にも入ってきた。この

店のタバコは割高のうえに古くて固くなっており、誰も買わなくなるという悪循環を招いた。彼は他の店の値段を気にしていたが、具体的な値段を全く把握しておらず、自分の店は他より高いかどうか、私に対して不安気に尋ねてくる有様だった。

[Bの商店]

40歳代女性B（世帯18）も商店を開いた一人である。彼女の夫はテオボキアの生協で働いた経歴をもつ。彼らの住居と店は小規模商売をやっていたKの家屋に隣接していた。

N村で本格的に商売を始めたのは1995年9月のことであり、11月には屋敷地の一部に店舗を建設し始めていた。しかし、実質的に商売を始めたのは7月の独立記念日前後、島の中心地テオボキアの島政府に付随する集会所においてであった。この時期は、独立記念日の饗宴における食料の大量消費を見込んで、テオボキア付近で数多くの個人や教会信徒グループがドーナツやパンなどの小規模商売を行っていた。Bは集会所に寝泊まりしながら、傍らに置いた小麦粉やタバコ、マッチなどを売っていた。また同年10月、島政府集会所での泊まり込みの際にも、Bは出張販売していた。

Bの夫になぜ商店を始めたのか聞くと、まず北タラワの中高等学校に行っている娘の学費のため、そして自分たちの生活のためと答えた。Bは開発銀行から3000豪ドル借りており、3年間で返済するとのことだった。主な商品は、米・小麦粉、缶詰類、キャビン・ビスケット、塩などの他、ドーナツもあった。この商店では現金のみならず、ココヤシの実でも売っていた。対照的に説教師は、ココヤシの実は集落やブッシュに落ちている物であり、それをめぐって喧嘩になるから、現金でしか売らないといていた。また先述のように、Kも当初はココヤシの実で取引していたが、コプラを作るのが重労働であること、腐った果肉が多いことから、現金取引のみに切り替えていた。

[Kの商店]

物資欠乏期にココヤシの実でタバコを売っていたKは、1995年1月にはすでに商店のライセンスを取得していたという。しかし、その後物資欠乏が厳



しくなり、首都から個人的に入手したタバコ以外は、しばらくの間とくに商品もなかった。物資が豊富に入荷し始めて後（1995年6月）、彼は高床住居に小麦粉や缶詰類をおき、商店を開いた。私が本格的な商店を始めた理由を尋ねると、単に自分のための現金が欲しかったからだと言っていた。Kは、先の2商店のように開発銀行から資金を借りることもなく、自己資金により商店を維持していた。したがって、一時的に多額の資金を利用しえた上記2商店よりも、商品の数や量も比較的少なかった。Kは、1995年11月になってから売買用の店舗を自分で建設し始めた。Kの商店は、突然商売を開始した二つの商店とは異なり、タバコとココヤシの実の交換から始まり、それを拡大させた商店といえる。一時期、娘に毎日ドーナツを作らせて、店で売っていたこともあった。

当初、Kの店は値段が高い（「不平等」と同語）と言われていた。しかし、1995年10月頃から手頃な値段（「平等」と同語）であるといわれるようになった。例えば説教師の店で75～80豪セント以上のタバコが、69～70豪セントだった。この点をKに聞くと、村人は安い店を選んで買い物するからだと言い、商店間の競争を意識していた。彼は他店の価格を大体把握しており、少し安い値段をつけていた。11月に入るとBの店もKに対抗して値段を安くし始めた。一方説教師だけは、アバマコロ交易の到着（後述）に伴って多少値段を安くしただけでこの競合に入らず、客も減ってしまった。

Kの商売に対する態度は、きわめて合理的であるように私は感じた。1995年11月7日、Kの兄は、孫にタバコを買いに行かせた。孫はタバコを買ってきたが釣り銭を持って帰らなかった。その日の夕方、兄がKのところへ釣りを要求しに行った。Kはノートを調べ、兄は掛売り（*taarau*）の借金があり、これでよいのだと言った。兄は何も言わず手ぶらで帰っていった。

#### [その他の商店]

塩をココヤシ果実で売っていた20歳代男性ら3人（世帯20, 21, 22）は商店を始めると言っていた。世帯が隣接し、20～30歳代で年齢も近い3人はよく一緒に漁に出たり、コプラを作ったり、塩やガソリンなどの小規模商売を

行っていた。そのうちの1人(世帯20)は、9月頃にはライセンスを取得し10月以降、本格的に商店を始めたいと語った。結局、私が去った後になって、商店を開いたという。

地方裁判長も商売のライセンスを持っていた。1995年9月初旬には首都から6台の自転車を購入した。1台は自分で使用し、残りの5台を1台当たり230豪ドルで村人に売った。仕入れ価格は210豪ドルだったので、掛売りさえなければ100豪ドルの利益をあげたことになる。

また、彼はN村におけるフカヒレとナマコを取りまとめ、仲買人からマージンを取っていたとの話がある。タビテウエア・ノースから来る仲買人に1000豪ドルほど預託されており、村人が取ってきたナマコやフカヒレを買い上げ、時折タビテウエア・サウスに来る仲買人に引き渡すのだった。裁判長を中心にした漁のグループがあり、そのグループでもナマコを獲って乾燥物に加工していた。

#### 4. アバマコロ交易の誘致

極度の物資欠乏期の後、タビテウエア・サウスではN村の他にも、複数の個人商店が興った。N村には少なくとも三つの商店が開業した。そのため一時期ほどの物資欠乏は起こらなくなったが、それでも不定期的な船便などのため、物資入荷量は不安定だった。この項では、商店林立に対する島の住民側、具体的にはその意見を代表する長老会議の対応を見る。この経過は、個人商店を興して蓄財を行う一部の個人と社会集団との相互関係と見なすことが可能である。

前項で触れたように、商店が林立し物資が増えたことに対して、人々は概ね肯定的に評価していた。しかし、商店を持つ一部の個人が莫大に見える利益を蓄財しているにもかかわらず、高値で売ることに対する不満の声が聞かれた。例えばラードの値段をみても、以前は1ポンド当たり1.1豪ドル程度だったのに、7月13日には1.3豪ドルになっていた。

以前は1本70豪セントほどだったタバコも値上がりした。6月27日、裁判長や長老会議議長らのサークルは1豪ドルでタバコを売っていた。説教師が80～90豪ドルでタバコを売っていたことはすでに述べた。これらの値段は売る人によって多少異なるが、政府の標準価格に比較すると割高であった(表4)。首都では30～40豪セントで買えるインスタントラーメンも、タビテウエア・サウスでは80豪セントすることがあった。

これらの値段は、売る人が独自に設定している。住民は高いと不平を言うが、売る側は適切だと考えていた。また、船便の不安定性も高値の主要な要因である。1995年5月16日に船が来て後、次の船が来るまで約2カ月かかっていた。人気のある商品(米や小麦粉、タバコ、缶詰など)は、次の船が来て入荷するはるか以前に売り切れてしまった。商品が売り切れると、店主やその息子がタビテウエア・ノースまで舟外機付きカヌーで出向いて個人商店などで物資を買い、持ち帰って自分の店で売る<sup>14)</sup>。タビテウエア・サウスの他店で仕入れた物資を売ることも行われていた。他店で買った物資に、ガン

表4 政府が定めた商品の標準価格

(単位:豪ドル)

商品名	キリバス標準価格
ベビーフード	0.93 / 瓶
米	0.38 / ポンド
小麦粉	0.38 / ポンド
砂糖 (フィジー産)	0.45 / ポンド
砂糖 (オーストラリア産)	0.53 / ポンド
蚊帳生地	1.86 / ヤード
蚊帳生地 (ポリエステル)	1.78 / ヤード
ノート (48ページ)	0.39 / 冊
ノート (64ページ)	0.51 / 冊
ツイストタバコ	0.71 / 本
洗濯石鹼 (棒状)	1.47 / 本
ガソリン	0.75 / リットル
灯油	0.64 / リットル

(出所) 通産雇用省 (MCIE), 標準価格表 (1994年4月29日) による。

リン代や利益分を上乗せして値段を設定するため、必然的に物価が高くなるのである。

7月の独立記念日前後、島政府の集会所における長老たちの泊まり込みの際に話題となったのは、個人商店の物価高であった。一部の個人が儲け、しかも価格が高いのは人々にとってつらいことだ、との意見に誰もが賛同した。

〈1995年7月14日〉 集会所で朝食を摂った後、この問題について話し合いが行われた。そのとき政府の標準価格表が村議員から長老たちに回された。これと比較すれば、タビテウエア・サウスにおける物価高は一目瞭然だった。

タビテウエア・ノースにはアバマコロ交易という卸売り会社が出店している。タビテウエア・サウスの商店主がノースへ行っても、そこでは買うことができず、一般の商店で購入する。さらに舟外機のガソリン代もかかるので、値段が高くなる。長老たちは、物資不足と物価高を解消するために、外部の大きな商店を誘致したいと言った。具体的には、首都にあるF商店の誘致を提案した。F商店の経営者はタビテウエア・サウスの国会議員の知り合いである。そこで国会議員が首都へ行ったときに、交渉してほしいという要望が出された。ところが国会議員は、この案に同意しかねていた。F商店は個人経営であり、利益は首都へ還流するだけで島住民には全く還元されないと主張した。彼は個人商店よりも、生協のような共同の組織のほうがよいと考えていた。しかし経営管理の問題、さらに住民による掛売りの問題が残ってしまう。

〈1995年7月15日〉 この日の午前中も物価高対策についての話し合いが行われた。結局、タビテウエア・ノースと同様にアバマコロ交易を誘致しようということで全会一致した。一部の長老は、「窮乏はなくなった」と早くも喜んでいた。

〈1995年7月17日〉 島議会 (*kauntira*) の議長、国会議員、長老会議議長が、無線で首都のアバマコロ交易マネージャーに連絡を取った。タビテウエア・サウスの現状を説明し、出店するように懇請したのである。また、タビテウエア・ノースのアバマコロ交易はライセンス所有者のみに売るというが、サ

ウスでは住民の誰にでも売るように頼んだ。しかし、この要請については同意が得られなかったという。

〈1995年8月18日〉 集会所で再び合議が行われた。N村からは議員、長老会議議長らが出席した。アバマコロ交易は正式に出店を承諾したので、店舗や職員の家をテオボキアのどこに建てるかなどを話し合った。

〈1995年8月23日〉 長老会議議長がN村の数世帯をまわり、アバマコロ交易の職員家屋の建設資材を準備するよう伝えていた。その妻によれば、壁や高床材として使うココヤシ葉柄、ヤシ縄、パンダナス葺き屋根を準備するという。また彼女は、村の商店は物価が高いので悪い、アバマコロ交易は安くてよいと語った。

〈1995年8月30日〉 N村から一部の長老や既婚男性がテオボキアへ、職員の家屋建設に出かけて行った。またアバマコロ交易の店舗は、倒産したKCWSの建物を補修して使うことになった。建設作業はタビテウエア・サウス全6村の交替で行い、労働報酬はない。作業は9月末まで続いた。

〈1995年10月4日〉 来島するアバマコロ交易の職員を迎えるため、島政府の集会所へ6村の長老が集まった。しばらくの間、長老たちは集会所に泊まり込むことになる。

〈1995年10月14日〉 貨物とともに船で職員がやって来た。集会所では歓迎の饗宴が行われた。一方、沖合では大量の船荷を降ろす作業が行われていた。船荷の積み降ろし作業は、船便ごとに持ち回りで1村ずつ担当する。今回はN村の男性が労働に従事した。貨物量が多いので労働報酬の額も大きいと男性たちは喜んでた。

〈1995年10月15日〉 早速、アバマコロ交易のタビテウエア・サウス支店が開店した。タビテウエア・サウス中から人々が店舗に集まって来た。人々の感想をきくと、皆口々に「たくさんの貨物がある」「タラワ（首都）と同じだ」「窮乏は無くなった」と言っていた。米や小麦粉、砂糖、ラーメン、コンビーフなどに加え、ミロ、サオ・ビスケット、たらい、カップ、コーディアル飲料など、これまでにタビテウエア・サウスの店でほとんど目にしなかった商

品が店の中にはぎっしりと積み上げられていた。新品の自転車数台も屋外に置かれていた。人々の表情は明るく、店舗の周囲にはぎやかであった。以前聞いたときには、ライセンスを持たない者はアバマコロ交易で買えないという話だったが、実際にはライセンスを持つ親族や友人を通じて、誰もが買えるようだった。

〈1995年10月26日〉 朝から23時頃まで、集会所で踊りの饗宴が行われた。客はアバマコロ交易職員3人と来島していた首都の公務員2人であった。この日までに、各村それぞれがアバマコロ交易職員への贈品を分担して準備した。例えば、N村では糖蜜とスワンプタロのプディングを、南端の村ではウツポの塩干しなどを用意したという。

〈1995年10月28日〉 アバマコロ交易職員のうち、開店のためだけに来ていた2人が飛行機で首都へ帰っていった。残る1人が島に残り、在駐して働くのである。彼の家族は後から来るということだった。10月31日、長老たちの集会所における泊まり込みは終了し、ピックアップ・トラックでそれぞれの村へ帰って行った。

アバマコロ交易が来て以降、物価は急速に下降した。10月末、Kの商店ではタバコ1本69～70豪セント、ラーメンは1袋35豪セントの値段だった。他の店でもラーメンは50豪セント程度であり、以前の80豪セントという高値ではなくなった。また、これまで目にしたことのない商品が人々を驚かせた。例えば、ある40歳代女性は動物を型取ったクッキーに驚嘆していた。彼女はティーベアのクッキーを見て「ネコの形のビスケットがあるなんて驚いた」と喜び、はしゃいでいた。

〈後日談〉 私が2000年7～8月にタビテウエア・サウスを再訪した際、アバマコロ交易は順調に営業していたものの、上記の個人商店はすべて消失していた。20～30歳代男性3人は、前回調査を終えて私が去った後、共同で商店を開いたというが、それもすでに無くなっていた。

村では代わりに、1～2年前から2軒の共同経営商店が建てられていた。

ひとつは「モーニング・スター」という名で、1999年7月に建てられた、村北部の住民12人の共同出資による商店である。村のカトリック教会に献金するために、グループでコプラを生産し始めたことが契機となり、商店設立に至った。店舗の傍らには、壁のない集会所様の建物が付随していた。もうひとつは「カヌーの中心」(*Nuka n te Wa*)という名であり、村の中・南部住民の7人が1998年に建てた商店である。いずれも、毎月一世帯ごとに持ち回りで店番を担当する。また、夜間は店番担当の世帯員が店に隣接する集会所や店舗に泊まり込んで、商品を見張っていた。

「モーニング・スター」の店番を担当していた30歳代男性に帳簿を見せてもらったところ、魚を村人に売ったり、コプラを換金して得た開店資金は1016豪ドルだった。1999年の決算を見ると、掛売り分が1303豪ドル、現金として店に保管されていた額はわずか61豪ドルしかなかった。仮に掛売り分の全てを回収すれば、年間の利益は348豪ドルあるが、現実的に全てを回収することは難しいだろう。店番によれば、個人の商店ではないから掛売り金の回収は恥ずかしくない、と主張していた。しかし、これまでの経緯を見る限り、この商店はいずれ倒産する可能性が高いと考えられる。

##### 5. 欠乏状況への対応：小括

物資欠乏期の小規模商売の隆盛を経て個人商店が林立し、首都のアバマコロ交易がタビテウエア・サウスに来るまでの経過を追ってきた。人々の物資欠乏への対応から次の点を指摘することができる。

(1) 人々は、首都や他島に比較してタビテウエア・サウスが物質的に窮乏状況(*kainnano*)にあると感じていた。物資欠乏は、商品連鎖の末端における、流通機構および交通の脆弱性に起因している。

(2) 輸入物資に依存する人々の生活に、物資の欠乏はきわめて重大な問題となる。この需要の高さを利用し、一部の個人が小規模商売を行っていた。さらに欠乏が進んだ後、人々のためという大義名分もあって商店を興す者が

現れた。これまでタビテウエア・サウスにおいて、個人商店を興し成功させることは困難であった。過去、N村に個人商店が設立されたことはなかったというし、隣村でも幾つもの商店が設立されたが、潰れてしまったという。個人商店が成功し難かった理由は、以下のとおりである。

- (a) 開店のための資金調達が困難だった。
- (b) 開店しても掛売りによって潰れてしまった。
- (c) 個人の財蓄積や突出した行為を嫌悪する、在地の平等性の影響があった。つまり、個人でなく共同経営商店のほうが設立しやすかった。

物資が極度に欠乏する以前、私が店を始めないのかとある男性に尋ねたところ、人々は怒って買うのを嫌がるだろうと彼は答えていた。他者と異なる、目立った企てを村内で行うことは、確実に妬みを喚起させる。他者を出し抜く行動は、目立たないようにした方がよい。そうでないと反発を受け、夜間に略奪さえされかねない。説教師が商店設立後、しばらくの間店舗に泊まり込んでいたのは、単なる盗難防止というよりも、反発する者による襲撃からの防御という意味合いがあったと解釈できる。

(3) 個人商店ができて時折物資は欠乏し、物価高も起こった。さらに一部の個人による蓄財が妬みを引き起こしたと考えられる。人々を代表する長老会議による対応は、首都から第三者の企業を誘致してくることであった。第三者の企業であるため、生協など共同経営の店と異なり、商品に対する権利を人々は主張しがたい。そのため掛売りによる負債蓄積も起こりがたい。また、個人商店とは異なり、個人の財蓄積も起こらない。直接的な発言は得られなかったが、誘致は個人商店への集団による対抗策と解釈することが可能だろう。商店の物価高は、在地の論理に反する「不平等」の語で表現されることは注目すべきである。私の知る限り、アバマコロ交易の誘致問題を話し合った島政府の集会所で開催された長老会議には、個人商店経営者は一人も参加していなかった。

(4) アバマコロ交易を誘致することにより物価高は沈静化し、少なくとも当面は長老たちの思惑どおりに事態は推移した。また、ライセンス所持者以



外にも親族関係などを利用すれば、誰でもアバマコロ交易で買い物できる状況であった。つまり、村の個人商店を避けてテオボキアへ行けば、卸値で物資を購入できるようになった。

(5) 5年後の2000年、N村の個人商店はすべて消失しており、代わりに共同経営商店が二つ建てられていた。ただし、これら商店も掛売りを防ぐことは困難であり、長期的に存続することはできないと推測できる。

#### 第4節 商店存続の条件

##### 1. 物資欠乏と掛売り

私の調査期間中、小規模商売が日常的に行われ、物資欠乏期を経て個人商店が林立するに至った。ここで、平等性に反するはずの個人商店が興った意味を考察する必要がある。すなわち、商店設立は何らかの正当な意義を与えられて社会的に容認されていたはずである。単に平等性に反するという否定的な意味づけのみがなされるならば、それが設立されるのは困難である。ここで、物資の極度な欠乏という危機的状況のなかで、一時的にせよ個人商店が社会的に必要とされていたことをまず指摘したい。

さて、人々の間には多かれ少なかれ、貨幣に対する欲望がある。しかし過度の欲望は、自ら抑制すべきとされる。タビテウエアをはじめ、キリバスでは他者より極度に突出することは、社会集団により厳しい抑圧を受ける。つまり個々人が他者を出し抜くとはいっても、欲望が単純に働くわけではない。また、ある人が他者の所有や消費レベル以下にあるということは、その人が窮乏状態にあると見なされる。人々は他者と比較して窮乏状態に陥らないように、あるいは窮乏から抜け出し、他者より僅かに抜きん出るようにさまざまな企てを行う。

極度の物資欠乏が起こったように、タビテウエア・サウスはキリバス中北

部の島々のみならず、他の南部の島々よりも物資が不足しがちであった。そのことを人々は強く認識しており、「ここは生活が厳しい、窮乏状態にある」としばしば口にした。タビテウエア環礁は厳しい自然条件下にあり、人々は輸入物資に生活必需品や糖質食料を依存せざるをえない。ところが、さまざまな社会・経済的要因により、物資欠乏が現実にはしばしば起きている。このような物資欠乏下にあって、窮乏から解放されるために、島内の流通機構を整備することが早急に求められるべき事柄であった。

集団レベルの平等性が強力に作用する社会にあって、流通機構を安定させるためには、社会集団が共同で商店を経営する形態をとることが最も理想的といえよう。実際、キリバスの他の島々と同様に、タビテウエア・サウスでも政府が肩入れしていた生協が、古くから物資の供給に貢献してきた。また、隣村においてもプロテスタント信徒が共同で経営する商店が存続している。しかし、社会集団共同の商店経営はきわめて難しい側面をもっている。たびたび言及した掛売りが、その主要な原因のひとつである。

私の調査以前、N村でも生協の支店が村人の共同で運営されていた時期があった。説教師が店を構えた店舗は、もともと生協の支店だったのである。生協N村支店に関する経営状況の詳細については不明だが、設立以後、村人の意見の対立により二つに分裂し、結局は潰れてしまったという。なぜうまくいかなかったのか村人に尋ねると、店員やマネージャーが怠惰 (*ruuti*) だったからだと言いがい<sup>15</sup>。マネージャーを担当した男性がいうには、まず人々が掛買いして金を返さなかったこと、店員も掛売りを拒否できなかったことを理由にあげていた。

掛売り (*taarau*) と懇請 (*bubuti*) の類似性と差異にも着目すべきであろう。今現在必要な物資を、十分に保有している者から調達してくるという点で、掛売りは懇請に類似した特徴をもつ。ただし懇請はサービス、道具、現金や食料などあらゆるものが対象になるが、掛売りは現金自体や、貨幣により購入すべき商品が対象である。また懇請には、必ずしも返済の義務がとくに意識されないのに対し、掛売りは返済義務が意識されるという違いがある。

つまり掛売りの方が「借りる」という意味合いが濃い。ところが、返済の期日が明確に定まっておらず、店の負債は蓄積してしまう。返済する前に倒産してしまえば、返済の義務を負う必要はなくなる。商品を懇請することは禁止されている (*tabuaki*) が、掛売りならば可能である。掛売りによって幾つもの共同経営の商店が消えていったという。

生協など共同経営の店では、出資者の村人が店の商品の掛売りを主張した場合、店員がそれを拒むことは難しい。店は村人のために設立されたのであり、ある村人がたとえ金を持っていなくても物資が必要ならば、掛売りさせるべきだというのである。また、店員も自分の直接的な負担にはならないので、真剣に拒絶することはない。もとより、人から頼まれたことを断るのは一般に恥 (*mama*) であり、掛売りの拒絶は困難である。日本の援助でタビテウエア・サウスに建てられた漁具店においても、掛売りによって多くの物資がただ同然で流出し、私の滞在中、店舗の中は空のままだった。

説教師は、生協のような共同経営の店とは異なり、個人の商店は掛売りを許さないのによいと主張した。つまり、彼個人の商店では掛売りは禁止されているという。しかし実際には、説教師は明言を避けていたものの、開店1カ月で、彼の商店では少なくとも70~100豪ドル以上の掛売りによる負債があったようである。個人商店であっても、必要な物を欲しがる人に対し、簡単に要求を拒絶することはできない。結局、掛売りという在地の論理によって商店は倒産し、流通基盤が整備されることなく、島において物資欠乏が実際に起こってきた。

個人商店が増加して以降、極度の物資欠乏から脱したのは事実である。この過程における個人商店や小規模商売は、きわめて重要な物資移入の窓口と位置づけることができる。個人による商店経営は窮乏を脱する一方策として、社会的役割が一時的でありながらも、認められていた。説教師は「自分だけでなく村人のために商店を始めた」と説明していたが、それは単なるいいわけである以上に、実際に物資欠乏が深刻化していたその時点で必要なものだった。個人商店は、潰れた共同経営の商店の代替物となっていたのである。

需要を見込んで、数人の村人が追隨して商店を開いた。ただし、このとき市場交換の論理が人々に容認・受容されたわけではない。結局、掛売りが止まることはなかったのである。

このように考えると、外来の商慣行のなかに懇請に類似した掛売りが生まれたと解釈できるだろう。商店における売買は、市場交換の論理の導入ではなく、懇請に類似した掛売りという在地の論理を付加したうえで撰取されてきたといえよう。

## 2. 平等性と商店

平等 (*boraoi*)、不平等 (*bobuaka*) という言葉は物価の安い、高いという意味をも表す。さらにこの言葉は、社会的な公正の基準となっている。平等な買い物であれば、買い手および売り手ともに公平な交換に満足しているといえる。個別の売買が平等である限り、社会的に容認されうる。個人商店が設立された当時、人々は喜んでいて。その後引き続いて起こった個人的な財蓄積は、明らかに平等性に反する。個人商店の成功と財蓄積について、私は直接的な非難の声を聞くことはできなかった。ただし、個人商店に対して不平等という評判が立ったことは、商店への不満が募っていたことを示す。「あの店は不平等である」という噂は商店主にとって恥であり、また社会的な承認を得られないという致命的な評価になりうる。

追隨して商店を開く者が次々と現れたことは、一時的ではあるが、商店の成功への妬みや羨望が村人の中で生じていたと解釈できる。前述のように、村の住民Nは売上金を数える説教師を真剣な表情で注視していた。通常、人々は他人の所有物や食物などを注視することを避ける。注視は他者の物資を羨ましがり (*mataai*)、妬み (*bakangtang*)、強く欲しがると (*ngenge*) ことに結びつくと考えられる。私自身、彼らのもつ道具などを珍しそうに見ていると「欲しいのか」と不安気に尋ねられたことが何度もあった。羨望 (マターイ) のマタ (*mata*) とは目という意味であり、見つめることは欲しがることを意味

する。したがってNが人目をはばからず注視したのは、商店の売上金額に単に驚いていただけでなく、羨望か妬みを示していたといえる。

個人の財蓄積が起こった時点で、物資欠乏状態からの脱出と不平等というジレンマが生じた。首都からアバマコロ交易を誘致したのは、このジレンマを解決する集団的な試みと位置づけられる。アバマコロ交易が開店し、物資が大量に移入して物価高も沈静化した。さらには共同出資ではない資金によって仕入れた商品を、首都から来た職員が売るため、理想的には掛売りも防げることになる。現実には防げたか否か定かでないが、説教師や長老会議議長はアバマコロ交易では掛売りは禁止されているといていた。

以上のことから、個人による商店設立という他者と異なった、突出した行為を行うこと、および個人による財蓄積が、平等性との相克を生むことがわかる。ただし、個人商店は平等性と衝突しながらも、一定の条件のもとで容認される可能性がある。商店における取引が社会的に容認されるには、(1)窮乏状態に人々が陥らないように物資を供給すること、(2)個人的な財蓄積が起こらないこと、(3)物価が高くないこと、の三つの条件があげられる。ただし、実際には個人商店がこれらの条件を全て満たすことは困難であり、掛売りを防ぐこともできず、N村では全ての個人商店が消失した。

### 3. 在地生産物の売買

外来の輸入商品を対象とした売買と、魚やココヤシ糖蜜など在地生産物の売買との間には、人々の対応に関して差異が見出せる。ここに、人々の貨幣に対する態度の揺らぎを看取することが可能である。

魚は元来世帯内で獲得し、消費するものだった。仮に多く獲れた場合には塩干しにして保存するか、鷹揚 (*tituaraoi*) に親族や友人に贈与すべきとされる。ゲッデスによると、塩干し魚や鮮魚を売った事例は、彼が調査した1970年代初頭のタビテウエア・ノースで、わずか1世帯しかなかった。しかも短い一時期だけの売買だった (Geddes [1983: 155])。

正確な年や経緯は不明だが、タピテウエア・サウスでは1970年代に個人的な魚売買が行われ始めたと推測できる<sup>16)</sup>。もちろん現在でも専業の漁師がいるわけではない。島では子供や女性も含め誰もが漁に携わる。また知人や親族に余分の魚を分配することも行われている。しかし同時に、現在では魚の売買が頻繁に行われるようになってきている。すなわち、貨幣による交換が不可能だった魚は、世帯間で売買されるように変化したのである。

魚が売買されることについて、長老たちは次のように言う。「私は魚が欲しい、あなたは現金が欲しい、そこで売買する。これは平等だ。恥ずかしいことは何もない」。ここで平等という語が登場してきたことに着目すべきである。平等性は、タピテウエア・サウスの社会的文脈において、きわめて重要な意味をもっていることを繰り返し強調してきた。平等であると人々が同意すれば、何ら問題は起こらない。恥とされる「自分の食料を他者に求める」ということと「現金を欲する」ということが、平等な売買と説明され、正当性を獲得するのである。買う側は、単にもらうのではなく見返りの現金を与えることで自らの恥を打ち消す。売る側は、鷹揚さを代償とするが現金を受け取ることができる。

私の調査期間中、村人の中で魚やココヤシ糖蜜など在地生産物の売買は日常的に行われていた。しかし、私のような村の客、および友人や近親者から現金を受け取ることはほとんどなかった。例えば、外洋漁の得意な男性は、私や親しくしている親族の男性に無償で魚を贈与していた。また、Bは自家製パンの代金を、そして糖蜜を作っていたある男性はその代金を、私から決して受け取らなかった。またBは糖蜜の売買は恥であると語っていた。

一方、商店での買い物においては、誰もが抵抗なく私から現金を受け取った。前述のKと兄のやりとりを見てもわかるように、近親者や友人であっても、商店では現金で支払うことが（掛売りは起こるが）当然とされている。これらをまとめると、以下の点を指摘できる。

- (1) 在地の生産物について、近親者や友人から現金を受け取ることは避けられる傾向にある。一方、その他の村人に対しては抵抗感が薄い。

(2) 商店に入荷した外来物資の売買は、売る側に恥を喚起させない。

商店において、外来物資の交換に現金を使用するのは抵抗がなく、自ら生産した在地生産物を現金で売ることには抵抗があること、そして相手によって抵抗感の度合いが異なることを見てとることができる。

魚売買は、平等性による正当化がなされたうえで行われている。贈与を行う場合には、友人や親族に与える。つまり、魚や在地生産物には、在地の論理に沿った贈与と、売買という相反する交換形態がみられる。さらに対象を拡大して捉えれば、社会集団レベルの饗宴や、懇請など個人レベルの贈与交換と、商店や小規模商売における売買は、ときに矛盾しながらも併存しているのである。

### 第5節 贈与交換のなかの貨幣——概括——

平等性が卓越する社会にあつて、売買は社会集団のために行うならば、在地の論理に必ずしも反しない。逆に、個人的な利益のための売買は、在地の論理に反する可能性がある。

資本主義的な市場交換の規則は、個人の排他的な所有や個人的な財蓄積を所与のものとし、贈与の論理や平等性、集団性とは直接的には相容れない。ただし、在地の論理と売買との関係は入り組んだ様相を呈している。ここでいう在地の論理とは、村落社会における平等性や集団性への志向、懇請や掛売り、恥や名誉、窮乏の回避といった、社会に生きる個人の行為選択に影響を与える、多様な観念を集合的に示す。この節では、売買に加えて、饗宴における贈与や懇請を含めて交換に関する議論をまとめてみる。

#### 1. 貨幣を用いた交換

市場交換における貨幣は、多くの社会で「反モラル性」を帯びたものとし

て、人々により捉えられてきた (Taussig [1980], Parry and Bloch eds. [1989] 参照)。太平洋においても、例えばフィジーでは、貨幣は呪術と結びつけられ、「土地のやりかた」に反するものとして論じられている (春日 [1992] [2001])。キリバスにおいても確かに、売買は「キリバスのやりかた」と対照的に、「白人のやりかた」といわれる。「タビテウエアの人々は現金を欲しがらない」と語る者もいる。しかし、全く逆に「今は誰もが現金を欲しがる」という言葉も頻繁に聞かれる。その言葉のなかに、とくに否定的な意味合いを読みとることは難しい。

むしろ現状を追認しているか、あるいは「知恵 (光: *ota*) が来た」と肯定的に語られることさえある。外来の商品は、単に売買目的で首都から取り寄せられたものである。これは単純に市場交換の規則に沿って取引が行われうる。

一方、ある女性が小規模商売で塩を売る世帯を訪問した際、現金もココヤシの実も持参しなかった。しかし彼女は塩を掛売りでなく懇請して持ち帰った (第3節2項)。小規模商売においては、在地生産物のみならず、売買目的の外来物資さえも懇請の対象になることがある。小規模商売においては、状況に応じて同一物が贈与されたり売買されたりする。

ここで、在地の論理に照らして貨幣を用いた交換をまとめると、以下のようになる。

- (1) 小規模商売：一時的であり蓄財の可能性は小さい。魚など在地生産物に加えて、タバコ、パン、塩などを売る。これらを商品として売買する行為は、在地の論理に反することがある。通常、小規模商売は市場交換の規則に従う。しかしその一方で、商品と同じ物を友人や親族に与えたり、あるいは懇請されることにより、贈与の領域に入ることもある。
- (2) 商店における売買：商店は、基本的に在地の論理とは相容れない。主に輸入物資を交換の対象物とする。市場交換の規則に沿って行われるが、在地の論理に則った掛売りも介入しうる。

個人商店を興すという個人の突出した行為は、私の調査期間中、極度の物資欠乏期以前には、忌避される傾向があった。さらに、個人による



財蓄積は、平等性に反する状態と見なされる。

- (3) 対外的な取引：首都へのコプラ移出，商店への物資移入といった島と外部世界との取引は，市場の論理に従って貨幣が用いられる。タビテウエア・サウスにおける対外的な取引は，資本主義のいわば外縁部に位置するといえる。

窮乏状況下において外来物資を購入するために，また脆弱な生業経済への対応として，現金および商店はタビテウエア・サウスの人々にとって必要不可欠である。貨幣経済は，歴史的な経緯のなかで単に外部から押しつけられたのではなく，人々によって社会的に容認され，摂取されていることができる。ただし貨幣が用いられているにせよ，市場交換の規則がそのまま移植されているわけではない。村落社会では，平等性や集団性といった在地の論理が卓越するなかで，贈与の領域が市場交換を凌駕している。両者は，時に矛盾を露呈し軋轢が生じる。

商店で行われる売買は，懇請に類似した掛売りに置換され，現金がなくても物資購入が可能となる。共同経営商店は，個人による財蓄積が起こらないために妬みを喚起することはないが，掛売りに伴う負債の増大よって容易に潰れてしまう。そこで，物資の極度な欠乏期に，共同経営に代わって個人商店が台頭してきた。これは個人の財蓄積の契機を伴うものであり，商店主は周囲の人々から妬みの対象とされた。共同経営と同様に，個人商店でも掛売りを防ぐことは困難であり，結局，個人商店は消失の道を辿ることになる。

## 2. 贈与交換と貨幣

タビテウエア・サウスにおける贈与交換の様態——饗宴時の贈与および日常的な懇請——について，簡単に要約すると以下のようなになる（風間 [1999a] [1999c]）。

- (1) 饗宴における贈与：公務員や教員など定取者は頻繁に饗宴に招待されて，繰り返し現金やタバコを村人に贈与し続ける。出稼ぎからの帰省者

も、一度の饗宴で多くの財を贈与する<sup>17)</sup>。

- (2) 教会関連の売買：教会への献金を目的とした饗宴における競売、献金目的で行う魚やパンダナス・マットの定取者への売買は、一見すると市場交換に類似する。しかしながら、これは「持つ者」(*kau bwai*)が現金を必要とする社会集団へ贈与するという性質が強い。

タビテウエア・サウスにおいては、貨幣自体が贈与交換の領域に組み込まれている。ここでの貨幣は、資本になりえない。これはキリバスに限らず、他の太平洋島嶼国の村落部でも見出せる現象である（たとえば春日 [2001: 373], Gregory [1980] 参照）。

- (3) 懇請：饗宴の場を離れても、定取者は恒常的に村人から懇請の対象となる。「持つ者」が個人的な所有物に排他性を賦与するには、秘匿するしか方法はない。集団レベルの平等性が再生産される饗宴の場では当然だが、日常的な場においても贈与交換の領域が支配的である。

商店主のみならず、公務員や教員などの定取者や出稼ぎ者もまた、財を蓄積することは困難である。彼らは、コブラ生産のみに生活を依存する人々に比べ、相対的に「金持ち」(*kau mane*)である。そして、饗宴の招待客として、現金やタバコを贈与し続けることを余儀なくされ、頻繁に物資を懇請される。外国船出稼ぎ者は多くの収入を得るが、親や兄弟に送金し、また故郷からの懇請に常時晒されている。個人が物資を秘匿できる範囲は狭く、多くの物資は他者の目に晒されてしまい、懇請を排除できない。

村落社会では、合理的な思考によって貨幣を蓄積させ、それを再投資して利潤を拡大していくような、いわゆる「資本主義的精神」を有する者は、吝嗇 (*kaiko*) 以外の何者でもなく、非難や妬みの対象とされてしまう。一方「持たざる者」は必ずしも返済の義務を負うわけではない。これは、社会集団のなかで、あるいは個人の日常生活において「持つ者」が一方的な贈与を行わざるをえないこと、在地の論理に従えば、個人の所有物の平準化が理想的には広く起こりうることを示している。

人々は貨幣を用いながらも、市場交換の領域は極度に狭く制限され、贈与

交換の領域が卓越し続ける。近代貨幣の導入が、一方的に贈与交換の領域を破壊することはなく、在地の論理と貨幣は併存しうる。このようななかで、財や物資の個人的な蓄積による経済的格差は、僅少なままに留めおかれるのである。

### おわりに：資本家階級発生の可能性

本章においては、パプア・ニューギニアでビジネス成功者が資本家階級として分化しうると論じた塩田の議論の対極的な例として、キリバス離島村落の商店を巡る様態を採りあげた。パプア・ニューギニアでは資本家階級発生の萌芽が見られるのに対し、キリバス離島村落ではその萌芽を摘み取る社会的な機序が作動していることは明らかである。この機序を論じることは、太平洋島嶼部において広く見られる、在地の人々によるビジネスの失敗を考察する鍵となる。これは、一般的に太平洋島嶼部では、在地の人々との紐帯が脆弱で、かつ相対的に少数の外国人が資本家として成功するという事実と符合するだろう。むしろ、パプア・ニューギニアのような、太平洋島嶼部内の地域大国という特殊な経済状況下でのみ、在地の資本家階級が発生する可能性を指摘できる。ここで、キリバスを例として資本家が発生しえない状況をまとめてみる。

キリバス南部離島は、19世紀以降、資本主義世界システムに包摂されてきた。しかし、資本を引き付ける経済的に有用な資源もなく、外部世界との絆は今日においてさえも脆弱である。ここで両義的な状況が生じる。人々は強力な資本からの搾取や干渉を受けずにすむと同時に、外部世界から流入してくる物資や財もきわめて少ない。商品連鎖の末端である離島村落においては、物資の流入が不安定なために極度な物資欠乏が生じ、ときに食料不足さえも起こる。この状況を解釈するにあたって、太平洋島嶼部における国家レベルの政治経済学的位置が重要な要因としてあげられる。加えて、在地の論理は

結果的に流通基盤を脆弱化させている。すなわち、強固な平等性や集団性により、人々自らが物資の欠乏を招来している側面もある。

ここで、離島村落における在地の平等性や集団性を再確認する必要がある。上記のように、タピテウエア・サウスでは、外部世界からの介入が弱いために、集会所を中心とした社会の編成については自律性を保つことが可能である。世界システム最周辺国家のさらに離島という位置により、構造的な物資欠乏が生起すると同時に、自律性の余地が残されるのである（風間 [1999a]）。村落内で親族の紐帯が脆弱化した現在、村やキリスト教会信徒といった社会集団の求心化が集会所を焦点としてなされている。集会所は、外部の論理を一時的に遮断して吟味したうえで受容する装置といえる（Kazama [2001]）。社会集団内では平等性が強調され、賃労働や財の配分が均等化される。饗宴においては、大量の食料を参加者全員で一度に消費する。また、日常生活においても、拒否できない懇請によって物資が配分され、親族や友人のネットワークに沿った均等化が起こる。

このような贈与交換の領域が卓越する社会において、在地の論理に適合しうる共同経営商店は容易に懇請に晒され、負債が蓄積して倒産してしまう。個人商店では、財の不均等な蓄積が生じるため、周囲の妬みを喚起させてしまう。村落社会のなかにあつて、貨幣は贈与の領域に取り込まれているために資本になりえず、経済的格差の拡大は抑圧され続ける。社会のなかで市場経済の論理が成立しえない以上、資本家階級発生の可能性はきわめて低いのである。

キリバスのみならず、多くの太平洋島嶼国は国家としての規模が小さく、開発するに足る有用な資源もほとんどないため、国内で大規模なビジネスを興すことは困難である<sup>48</sup>。結局、小島嶼国では、国民経済の自律的な「発展」が望みえないという前提に立つしかない。海外からの援助などのレント収入なくして成立しえない小島嶼国の経済は、MIRABモデルによって示されてきた。例外的に、フィジーやパプア・ニューギニアといった地域内で規模の大きな国家では、産業発展の可能性があると同時に、比較のうえで市場規模

も大きく、国家の財も相対的に大きい。これら二国で教育エリートや資本家といった中産階級の出現が強調されてきたことは、容易に納得できる<sup>19)</sup>。

広く太平洋島嶼部諸社会を見渡して階級に関する議論を行うには、贈与交換を含む広義の社会経済的諸相に着目する必要がある。その場合、在地の論理や社会編成に関する洞察が不可欠である。また、島嶼部の諸社会は、政治経済的特徴において微細な差異があり、多様な歴史的背景を有する。したがって、階級分化に親和性をもちうる社会と、そうでない社会が見出される可能性がある。本章で採りあげたキリバスの村落社会においては、政治経済レベルの限定的条件に加えて、強力な平等性、集団性が社会の内部で卓越することにより、経済格差は僅少なままに留めおかれ、資本家階級の分化は生じえないのである。

〔注〕 \_\_\_\_\_

- (1) ここでは、19世紀以降の資本家と労働者を二大要素とする階級論よりも、20世紀の新中産階級の登場を論じた、ミルズのホワイトカラー論のほうが比較のうえで親和性をもつだろう（ミルズ [1957]）。ただし、アメリカ合衆国社会における事務職や専門職の役割増大を、太平洋島嶼国の状況に対して、安易に適用することはできない。島嶼国では、資本主義が自生的に発達してきたのではなく、むしろ外部から資本主義システムに巻き込まれてきた。この地域の国々では、現在でも経済発展の困難さが大きな課題となっている。
- (2) ただし、中産階級は、資本家と労働者というこれまでの階級概念における主役からはずれた脇役としてしか見なされてこなかった。中産階級は、国民文化や都市文化の形成において積極的な役割が認知されるようになってきた（春日 [1991: 164]）。
- (3) 太平洋島嶼国における新たな階級の出現を強調する論調において、支配的な階級に該当する人々は、都市エリート (urban elite)、支配階級 (ruling class) などと名づけられてきた (Keesing [1996], Hau'ofa [1987])。その対極には、都市スラムに住む貧困層や、村落部に生きる住民が位置付けられている。これらの人々は、グラスルーツ、特権のない下層階級 (under privileged class) あるいは、周辺的な貧しい村落住民 (peripheral poor villagers) 等と名づけられてきた。太平洋島嶼国における階級論では、教育エリートやビジネス成功者に対する、都市貧困層および村落住民という対立軸が設定されており、そこでは生活様式の差異や不均等な財の配分が問題とさ

れている。

- (4) 「資本主義的精神」は、正当な経済活動を通じて富の追求に自己を捧げ、得られた利得を個人的享楽に消費することを禁欲するという、特異な結びつきによって特徴づけられる（ギデンズ [1974: 147] [1986]）。なお、市場経済は必ずしも資本主義を包含するわけではないが、本論では以下、「資本主義的市場経済」を単に「市場経済」または「市場交換」と表記する。
- (5) 欧米において発達した経済概念は、人類学者の調査地における人々の観念とは往々にして異なる。調査地の人々は、貨幣を用いた取引とともに、多様な贈与と交換を行っている。近代貨幣が贈与と交換の領域で用いられることもしばしばある（Gregory [1980]）。さらにいえば、貨幣自体の意味づけにも多様性がある（Parry and Bloch eds. [1989]）。人類学においては、経済の用語を広く贈与と交換を含めて捉えることになる。
- (6) Gilbertの現地語がKiribati（キリバス）という国家および主要諸島の名称となっている。同諸島は、遅くとも19世紀初頭までにはすべての島々がヨーロッパ人によって確認され、以降、捕鯨船乗組員や交易者などによる接触が頻繁になった。その後、キリスト教が普及していった。同諸島は、1892年に英国保護領となり、1916年にエリス諸島（現ツヴァル〈Tuvalu〉）とともに、英国植民地（GEIC: Gilbert and Ellice Islands Colony）となった。第二次世界大戦後、1979年になって英国から独立するに至った。
- (7) 私はキリバスに1994年から1996年までの22カ月間滞在し、うちN村で延べ13カ月間滞在して実地調査を行った。さらに、2000年7月から8月にかけて1カ月間N村において調査を行った。なお、タビテウエア・サウス行政区は全6村からなる。
- (8) 小島嶼国の経済は、世界経済の動向に大きく左右されるために、MIRAB経済論は、現実の経済状況を反映したモデルとして適合性を失いがちである。ただし大枠として、小島嶼国は、自国内産業による経済発展がきわめて難しく、海外からもたらされるレント収入に依存せざるをえない。この経済的特徴は「レント収入依存型経済」とよばれる（佐藤 [1993]）。
- (9) キリバスからの海外出稼ぎは、国家の主導する外国船への出稼ぎが主である。青年男性が入試に合格して訓練校に入り、修了後にようやく船に乗ることができる。外国船出稼ぎ者は契約労働者であり、いずれ帰国することになる（風間 [1999b]）。一方、MIRAB経済の出稼ぎ移民は、家族とともに外国に住み、不熟練労働に従事する。彼らは、帰国を予定しているとは限らず、次世代以降も居住し続ける可能性がある。
- (10) ただし、不定期の賃労働による収入は、長老の決定により個人に配分されず、村やキリスト教会のために使われることがあった。
- (11) その後、KCWSの後継として、半官のキリバス生協有限会社（BKL: Bobotin

Kiribati Ltd.) が設立された。

- (12) カタラによると、首都南タラワで50個のココヤシ果実を計測したところ、1個平均140グラムのコブラが取れた。アベママ (Abemama) 環礁では1個平均170グラムであった。また早魃時のニクナウ (Nikunau) 島では1個平均52グラムという結果だった (Catala [1957])。Kが商売を行っていた年は比較的多雨だったため、ココヤシ果実1個当たり150グラムのコブラが取れると仮定した。
- (13) 通常、人々が私と話すときにはキリバス語を使っていた。キリバスでは、教員や官僚などを除いて、英語を話せる人は少ない。この事例で説教師の娘が英語を使ったのは、皮肉をこめていたものと私は解釈した。
- (14) タビテウエア・ノースには、植民地期に環礁の政治的中心地がおかれていた。独立後も、飛行機便や船便はサウスよりも多く、比較のうえで物資欠乏の度合いは弱いと考えられる。
- (15) 通常、怠惰を意味する場合、タニガロス (*taningaroti*) という語を用いる。しかし、商店の倒産に関して、英語 (loose) 由来の語が必ず用いられていた点は興味深い。
- (16) ある30歳代男性によるとN村では1970年代初頭に魚売買が行われるようになったという。またKは、20歳代前半の息子が幼かった頃は売買が行われていなかったが、15歳の娘が生まれた頃には始まっていたという。つまり彼によれば、N村では1970年代後半に魚売買が始まったということになる。
- (17) 一方、子供の出生など、小規模な人生儀礼の饗宴においては、同等者としての村人間で、金額的にはほぼ均衡した現金と食事の交換を行う。また、スワンプトロなどの特別な在地生産物は、村人から外来者や帰省者に贈るときのみ、交換対象物となる。
- (18) 太平洋島嶼国では、観光産業が発展したり、地下資源の採掘が行われている場合であっても、それは外国資本の進出によるものであり、現地の人々は搾取の対象となってきた。
- (19) 小島嶼国のひとつであるトンガにおいても、高学歴のエリートを中心とした中産階級の出現が論じられている (Benguigui [1989], Marcus [1981])。トンガでは、王族、貴族、平民といったいわゆる伝統的な社会成層システムが発達しており、その作用 (あるいは反作用) がエリートの特化を促したと解釈できるかもしれない。

## 〔参考文献〕

## 〈日本語文献〉

- 上野千鶴子 [1996] 「贈与交換と文化変容」(『現代社会学17. 贈与と市場の社会学』岩波書店, 155~178ページ)。
- ウォーラーステイン, I. (川北稔訳) [1981] 『近代世界システム I・II』岩波書店。
- 風間計博 [1997] 「キリバス南部環礁における輸入食料依存の実態—在地食料システムへの創造的摂取—」(『アジア経済』第38巻第7号, 2~33ページ)。
- [1999a] 「タビテウエア・サウスに生起する窮乏と主体性の併存—人類学における地域経済モデル活用への試論—」(『民族学研究』第63巻第4号, 382~404ページ)。
- [1999b] 「キリバスにおける出稼ぎ形態の変化と村落社会」(『アジア経済』第40巻第12号, 2~26ページ)。
- [1999c] 「タビテウエア・サウスにおけるボータキ(饗宴)の氾濫—周辺社会に生起する窮乏と主体性の併存—」(『アジア・アフリカ言語文化研究』第57号, 241~280ページ)。
- [2002] 「珊瑚島住民によるスワンプタロ栽培への執着—キリバス南部環礁における掘削田の放棄と維持—」(『エコソフィア』第10号, 101~118ページ)。
- 春日直樹 [1991] 「エスニシティーと階級—フィジーの事例から—」(『奈良大学紀要』第19号, 161~175ページ)。
- [1992] 「キリスト・悪魔・貨幣—フィジーの呪術と資本主義—」(『社会人類学年報』第18号, 33~55ページ)。
- [2001] 『太平洋のラスプーチン—ヴィチ・カンパニ運動の歴史人類学—』世界思想社。
- ギデンズ, A. (犬塚先訳) [1974] 『資本主義と近代社会学理論—マルクス・デュルケム・ウェーバーの研究—』研究社。
- (宮島喬ほか訳) [1986] 『社会学理論の現代像—デュルケム・ウェーバー・解釈学・エスノメソドロジー—』みすず書房。
- 佐藤元彦 [1993] 「オセアニア島嶼国の〈レント収入依存型〉経済的自立」(清水昭俊・吉岡政徳編『オセアニア3. 近代に生きる』東京大学出版会, 201~216ページ)。
- 須藤健一 [1997] 「家族的ネットワークに依存するMIRAB国家」(青木保ほか編『岩波講座文化人類学4. 個からする社会展望』岩波書店, 132~157ページ)。
- ミルズ, C. R. (杉政孝訳) [1957] 『ホワイトカラー—中流階級の生活探求—』創元新社。



安田尚 [1998] 『ブルデュー社会学を読む—社会的行為のリアリティーと主体性の復権—』 青木書店。

〈外国語文献〉

- Benguigui, G. [1989] “The Middle Class in Tonga,” *Journal of the Polynesian Society*, Vol. 98, No. 4, pp.451-467.
- Bertram, G. [1999] “The MIRAB Model Twelve Years on,” *The Contemporary Pacific*, Vol. 11, No.1, pp.105-138.
- and R. F. Watters [1985] “The MIRAB Economy in the South Pacific,” *Pacific Viewpoint*, Vol. 26, No.3, pp.497-519.
- Catala, R. [1957] “Report on the Gilbert Islands: Some Aspects of Human Ecology,” *Atoll Research Bulletin*, Vol.59.
- Fenton, S. [1999] *Ethnicity: Racism, Class and Culture*, London: Macmillan Press.
- Finney, B. R. [1973] *Big-men and Business: Entrepreneurship and Economic Growth in the New Guinea Highlands*, Honolulu: University Press of Hawai'i.
- Geddes, W. H. [1983] *Tabiteuea North. Atoll Economy: Social Change in Kiribati and Tuvalu, No.2*, Canberra: Australian National University.
- Gewertz, D. B. and F. D. Errington [1999] *Emerging Class in Papua New Guinea: The Telling of Difference*, Cambridge: Cambridge University Press.
- Gregory, C. A. [1980] “Gift to Men and Gift to God: Gift Exchange and Capital Accumulation in Contemporary Papua,” *Man*, Vol.15, pp.626-652.
- Grimble, A. F. [1989] *Tungaru Traditions: Writings on the Atoll of the Gilbert Islands*, Honolulu: University of Hawai'i Press.
- Hau'ofa, E. [1987] “The New Pacific Society: Integration and Independence,” A. Hooper and others eds., *Class and Culture in the South Pacific*, Suva: University of the South Pacific, pp.1-29.
- Kazama, K. [2001] “Reorganized Meeting House System: The Focus of Social Life in a Contemporary Village in Tabiteuea South, Kiribati,” *People and Culture in Oceania*, Vol. 17, pp.83-113.
- Keesing, R. M. [1996] “Class, Culture, Custom,” J. Friedman and J. G. Carrier eds., *Melanesian Modernities*, Lund: Lund University Press, pp.162-182.
- Marcus, G. E. [1981] “Power on the Extreme Periphery: The Perspective of Tongan Elites in the Modern World System,” *Pacific Viewpoint*, Vol. 22, No. 1, pp.48-64.
- Maude, H. E. [1977 (1963)] *The Evolution of Gilbertese Boti*, Suva: University of the South Pacific.
- [1980 (1961)] *The Gilbertese Maneaba*, Suva: University of the South Pacific.
- Ministry of Finance [1988] *Kiribati: Sixth National Development Plan 1987-1991*,

Tarawa.

Parry, J. and M. Bloch eds. [1989] *Money and Morality of Exchange*, Cambridge: Cambridge University Press.

Savage, M. [2000] *Class Analysis and Social Transformation*, Philadelphia: Open University Press.

Taussig, M. [1980] *The Devil and Commodity Fetishism in South America*, Chapel Hill: University of North Carolina Press.

Trease, Van H. ed. [1993] *Atoll Politics: The Republic of Kiribati*, Christchurch: University of Canterbury.